

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18315

研究課題名（和文）法的人格を付与されたワンガヌイ川との共生デザインモデルに向けて

研究課題名（英文）Toward a Convivial Design model with the Whanganui River, a legal person

研究代表者

稲村 徳州 (INAMURA, TOKUSHU)

九州大学・芸術工学研究院・助教

研究者番号：70796458

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000 円

研究成果の概要（和文）：法的人格を得た最初の川であるワンガヌイ川、フィンランドの河川や水環境、福岡県を流れる那珂川を往還し発想法共生モデルを参画的に進めた。特にマオリの世界観から着想を得て、その教育を受けていないものでも川との関係性を構築し、エンパシーや想像力を発揮することができるかについて川と共生する身体的・生態模倣的手法を考案した。実地での研究を重ね、地域住民や研究者、カナダ原住民のリーダー等と交流しワンガヌイ川流域にてマオリの世界観に基づく川との共生環境、アート、デザイン、サイエンスを横断するアクティブなコミュニティと関係構築やダイアログを行い、川の共生プロトタイプに向け継続した連携関係を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はデザイン学の視点から身体的に川との共生関係を育む実践と理論を行き来する研究であり、法的人格化を得たワンガヌイ川でのコミュニティと繋がり今後も継続する関係を構築した。また本研究はポスト人間中心の共生を行うための発想法の開発につながった点も重要な意義がある。さらに本研究はDESISや世界デザイン会議という国際的デザイン研究コミュニティに注目を受け、ポスト人間中心のデザイン学に向けて研究体制を構築する上で意義があったと言える。さらにこのような研究を反映する国内のプロトタイプを進め、二級河川である那珂川で試行を行うことで社会に向けて一定の応用、展開へとつながった。

研究成果の概要（英文）：Starting with the Whanganui River, the first river to gain legal personhood, multiple bodies of water in Finland, and the Naka River, which flows through Fukuoka Prefecture were engaged as living bodies of water. Particularly inspired by Maori worldview, the investigator devised an embodied and biomimetic method of living inwith the river, building entry to empathy and imagination with pluriversality; contributing to practice on the Nakagawa. Participating in events and dialogues including a crucial climate forum in Whanganui, the investigator engaged with communities including local peoples, researchers, and Canadian tribal leadership. built relationships and dialogues with an active community in the Whanganui River basin. Through engaging with multiple places, and disciplines, transversing art, design, and science and policy; this project explored flows of engagement, toward an ongoing collaborative inquiry into living with bodies of water.

研究分野：デザインエンジニアリング

キーワード：meditative design legal personhood post human-centred Whanganui

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) アオテアロア・ニュージーランドは自然と人間との共生に国家レベルで熱心な国として知られるが、その象徴的な例として、世界で初めて川に法的人格を認める法案が2017年3月20日に発効された。¹ニュージーランドで3番目に長いワンガヌイ川に、先住民マオリ族に受け継がれてきた「川は私であり、私は川である」という自然と人間の不可分さを反映した世界観に基づき、法的人格が付与されたのである。川＝法的な人格という考え方やそれがもたらす状況の変化は、現在進行中の現象として見守っていく段階にあるが、持続可能な未来を作る新たな手段として期待されている。

(2) 初めて法的な人格を与えられたニュージーランドのワンガヌイ川に関わる人と場の関係性の調査を通じて、これまで、ワンガヌイ川に関しては地理学、環境学、文化人類学などからの研究があるが、法人格を得たのが最近ということもあり、そのことがもたらす意味や効果についてはまだ十分に検討されていない。法的な人格は、これまで大学や会社等、人間社会が作り出したモノに対して付与されてきたが、人間の存在と不可分な生態系を法人格化するという物語性(narrative)に富む行為の意味と効果はまだ明らかとは言えない。

(3) デザイン学の文脈では人間を中心に据えたデザインが主流になって久しいが、そこでは、人間以外の存在がないがしろにされるケースが問題となってきた。そこで昨今は、複数の人間の関わりや、人間をとりまく環境との共存を視野に入れた、ポスト人間中心主義のデザインを考案すべき時期に来ている。このような状況において、元来人ではないものを「人」として扱うことで、デザイン学のこの問題点をどのように超越しうるかを検討することは重要であると考えられる。このような領域を扱うことで、社会を律する法や政策とデザインの接点について再考することにもつながるためである。また自然の権利を尊重した川の法人格化の事例を通じて、デザイン学における「リーガルデザイン」の応用モデルの提起も求められている。

2. 研究の目的

(1) ポスト人間中心的考えをデザイン学から見つめ、「ひと」と認知された川を核とした地域の複数コミュニティの共生モデルのプロトタイプを制作することを目的とする。よって本研究では以下の二つの問いを設定する。

(2) ワンガヌイ川における「ひと」と場の形成はデザイン学の視点からどのように理解できるか？

(3) 「ひと」としてのワンガヌイ川の存在により、地域の複数コミュニティの共生モデルはどのようにプロトタイプすることができるか？

3. 研究の方法

(1) 文献、図書館調査

(2) ワンガヌイ川流域およびその他の現地実地調査、ネットワーク形成

(3) 近接の川での実践研究

(4) その他の川や水域調査

(5) プロトタイピング

(6) 研究成果の応用、展開

(7) 総合的考察

4. 研究成果

(1) データベースでの調査のみならず、現地での文献調査を重視し行った、主にワンガヌイ、タマキマカウラウ・オークランド、テ・ワンヌガイ＝ア＝タラ・ウェリントンの図書館にて行った。学術と地域コミュニティをつなぐ意味で、本研究では図書館が重要なハブになっていると考えている。いずれの図書館でも、世界のさまざまな地域における先住民の権利、自然の権利に関する文献のコレクションが目立ち、このテーマに関する意識の高さがうかがえた。なかでもワンガヌイの図書館では、テ・アワ・トゥプア条例に関する書籍、新組織の投票方法などの情報が展示されていた。マオリ文化の専門図書館員にインタビューを行ったところ、地元のマオリ社会で強いネットワークを持つことが判明した。新しい組織についての詳細情報を得ることができた。

(2) フィールドワークではワンガヌイ川の上流の霊峰トンガリロから河口までの流域を調査し、複数箇所で見聞き調査を行った。このうち一部をカヌーで中流域、河口域を探索し、新体性を重視した調査を実践した。重要なリードコミュニティとして、ワンガヌイのマオリ部族、コロニアル時代の汽船などを用いた観光業、サイクリング或いはカヌークラブなどを特定し、インタビュー



図1 ワンガヌイ川の身体的探索

を行った。政策への影響などを理解するため環境保全省への聞き取りを行った。同省でも図書館と同様に公的職務とともにマオリコミュニティで活動する職員がおり、川と生きる人の多義的關係性が重要であることを特定した。またニュージーランドの国立博物館テパパの展示視察を通して、マオリ族と移民の歴史、自然史、農林水産業の移り変わりのナラティブを抽出した。またワングヌイ川の法的人格化でワングヌイ地域を代表する Nga Tangata Tiaki o Whanganui との連携に関しては Ngati Haua Iwi Trust と接触しヒアリングや今後の関係構築に向けて協議を進めた。

(3) 近接の川とワングヌイ川を往還し、共生モデルのプロトタイピングを進めた。福岡の所属キャンパスに最も近い那珂川の持続的発展を目指す那珂川みらい会議を発足した。所属研究院、ミズベリングファンクラブ福岡、地元行政などを始め、広く共創を行う会議体であり、本会議体のコアメンバーとして参画した。準備段階においてもワングヌイ川からの学びについて共有を行った。また研究代表者の所属キャンパスにおいても那珂川みらい会議を開催し、川の求められる未来についてのアイデア創出を産官学民の参画者で行った。またこれまでの研究から生まれたデザインコンセプトやワングヌイの事例を紹介した。また教育との連携では川との関係性をデザインの課題を設定し、川の生命を意識しアイデア出しを行った、これは(5)の発想法開発へとつながった。これらの活動も一助となり、令和4年度に川の未来ビジョンやプラットフォーム形成を行う助成事業に応募し、採択された(官民連携まちなか再生事業)。また別の学生主導で地域の小中学校へ参加を呼びかけ、公民館で川をモチーフにしたTシャツアート制作を行ない、そのアウトプットを那珂川でのイベント開催時に展示した。

(4) その他の川や水域調査ではワングヌイ川の特性を理解するため、他国の調査も行った。フィンランドのヘルシンキを通るヴァンター川の流域の実地調査を行った。歴史的観点、文化的観点からのヘルシンキ市内の美術館や博物館の調査から、ポスト人間中心のテーマにした現代美術の展示や先住民のサミ族の存在を示す展示などを通じ法的人格化はされずとも同時代的なシフトを確認した。またフィンランド伝統の水辺の暮らしを船・水泳体験などを通じて身体的に考察した。

(5) プロトタイピングは主に二つの層に分けて説明する。第一に川と共生する発想法である。これまでのワングヌイ川、フィンランドの河川や水環境などの共生に関する調査を通じ、特にマオリの世界観から着想を得て、いかにして先住民の育んだ世界が持つ包括性を捉え、その世界観の教育を受けていないものでも川との関係性を構築し、エンパシーや想像力を発揮することができるかについて考案した。所属機関の学生とのアートやデザイン制作を行いながら検討を重ねた。その世界観・視点・視座のありかたから着想をえた川と共生する身体的・生態模倣的手法を考案し、那珂川の生態系での活用方法をまとめた。次に共生モデル全体としては実地調査などを通じその複雑や重層的関係性を理解するにつれ、より慎重な関係性構築が必要であることが判明した。特にコロナ禍の間によって当初作った関係性を温めるなど継続した関係性作りは難航したことも要因だった。よってワングヌイで主催する現地の活動への参画を通じた方法へとピボットした。2019年度より参加している Sustainable Whanganui の情報を通じ Whanganui Climate Forum の開催を知り、同フォーラム参画した。Te Ao Hou マラエ(集会場)にフォーラム参画者として議論に参加し・地域住民や研究者、カナダ原住民のリーダー等と交流を行った。このことより、ワングヌイ川流域にてマオリの世界観(Te Ao Maori)に基づく川との共生環境、アート、デザイン、サイエンスを横断するアクティブなコミュニティと関係構築やダイアログを通じ、今後の連携について検討を行った。また一刻を超えた視座での自然の権利について新たな命題が明らかになった。

(6) 研究成果の応用、展開について述べる。Design for Social Innovation and Sustainability (DESI) の支部(ラボ) DESIS-Q の共同発起人となった。DESI ネットワークの研究発表を行い。これを皮切りに、伊・ミラノ工科大学 Ezio Manzini 名誉教授より招待を受け、DESI: Climate Conversations に参画した。これらの研究公開活動からカナダ Emily Carr University of ART + Design の研究交流など具体的計画等を協議している。DESI ネットワークを通じ、本研究の発表きっかけに当該命題を軸に国際研究連携に向けた協議を進めている。

(7) 総合的考察

本研究を通じ、(2) ワングヌイ川における「ひと」と場の形成はデザイン学の視点からどのように理解できるか？ (3) 「ひと」としてのワングヌイ川が存在により、地域の複数コミュニティの共生モデルはどのようにプロトタイプすることができるか？という問いについて上記に示した進展を得た。今後の更なる実践的研究、理論的研究を進める。本研究はマオリ族の世界観の更なる理解やデザインエンジニアリングの実践研究者・人間として生き方自体と向き合うプロセスであり、多義的世界観を尊重した研究を今後の指向性とし、研究の中で関わったみなさま感謝を示し考察とする。

<引用文献>

- ① Charpleix, Liz. "The Whanganui River as Te Awa Tupua: place - based law in a legally pluralistic society." The Geographical Journal (2017)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tokushu INAMURA, Melanie SARANTOU	4. 巻 33
2. 論文標題 Design with More than Humans: Reimagining Social Biomimicry through Collaborations in Learning, Performance and Coauthorship	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 RESEARCH + EDUCATION FORUM TOKYO 2023: Forum Proceedings	6. 最初と最後の頁 116,124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 Tokushu Inamura	4. 巻 Vol 17, No. 6
2. 論文標題 Design Praxis with the Kingfisher and Bacteria; The River as Place for Post Human-Centered Design learning	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Design for All (ISSN : 2582-8304)	6. 最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tokushu INAMURA, Melanie SARANTOU
2. 発表標題 Design with More than Humans: Reimagining Social Biomimicry through Collaborations in Learning, Performance and Coauthorship
3. 学会等名 World Design Assembly RESEARCH + EDUCATION FORUM TOKYO 2023: Forum Proceedings（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tokushu INAMURA
2. 発表標題 Design with More than Humans: Reimagining Social Biomimicry through Collaborations in Learning, Performance and Coauthorship
3. 学会等名 DESI Cafe（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 稲村 徳州
2. 発表標題 生態系とポストヒューマンセンタードデザイン
3. 学会等名 Ecological Memes Volume 1 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲村 徳州
2. 発表標題 ポスト人間中心のデザインへの入り口
3. 学会等名 未来デザイン学センター人間環境デザイン部門シンポジウム「サイエンスとデザイン」 (招待講演)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 稲村 徳州
2. 発表標題 ポスト人間中心へ向かうけものみち
3. 学会等名 九州大学附属図書館芸術工学分館 第16回サイエンスプランター (招待講演)
4. 発表年 2018年～2019年

〔図書〕 計1件	
1. 著者名 Lehtonen, M.J., Kauppinen, T., Sivula, L. (eds)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Palgrave Macmillan, Cham	5. 総ページ数 277
3. 書名 Design Education Across Disciplines	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------